加入国際学術団体に関する調査票

1　国際学術団体活動状況（内規第 11 条　活動報告）

<table>
<tr><td rowspan="3">団体名</td><td>和</td><td>国際栄養科学連合</td></tr>
<tr><td>英</td><td>International Union of Nutritional Sciences
（略称 IUNS）</td></tr>
<tr><td>団体 HP（URL）</td><td>/http://www.iuns.org/
（日本学術会議が加盟していることの記載 (有)・　無　）</td></tr>
<tr><td colspan="2">国際学術団体における最近のトピックについて
（学術の進歩，当該団体の推進体制の変化，国際機関・政府・社会との関わり方等）</td><td>栄養は生命を支える根幹であり，栄養の不足または過剰による健康への悪影響は世界の最重要課題のひとつであるが，状況は改善よりむしろ悪化に向かい続けてきた。栄養状態の改善は，17 の持続可能な開発目標（SDGs）の目標 2 に該当し，さらにその他計 12 の目標達成に緊密に関係している。現在世界で約 1 億 5 千万人の子どもが発育阻害に陥っており，2000 万人の乳児が低体重で生まれている。子どもたちの死因の約半数が栄養不良に起因する一方，成人や若者，さらには子どもの過体重や肥満の著しい増加が健康を蝕んでいる。世界の 20 億人が過体重または肥満であるが，そのうち 7 割が低・中所得国に属する。このように現代の世界では人口増大等による栄養の欠乏と過剰な摂取を背景とした疾患の拡大が大きな問題となっており，さらにこれらが同一のコミュニティーさらには個人に共存する「二重負荷」が各国家の負担となっている。IUNS はその発足時より，栄養問題を学術面から解明し，その解決に向けた方策を科学的に提供する努力を続けてきた。4 年に一度の国際栄養学会議での情報発信や議論に加えて，様々なタスクフォースや提言等を通じて各国における栄養問題の解決・改善に貢献してきた。
1946 年に数カ国で発足した IUNS であるが，現在 81 の国や地域がそのメンバーとなり，IUNS の活動を支える一方で，各国の栄養状況が研究課題とされてきた。さらに 4 年に一度開催される IUNS の International Congress of Nutrition（ICN）には毎回 100 を超える国からの発表者が集結する。現在 IUNS は理事会によるリーダーシップのもとに運営され，重要な決定は全加盟国による総会においてなされている。
現在の国際学術会議（ISC）に関しては，IUNS は 1968 年</td></tr>
</table>

	からICSUのメンバーとなり，現在に至るまでその活動に積極的に関わっている。関連団体として，国際保健機関（WHO）や国連食糧農業機関（FAO）があり，国際的な食糧・栄養問題や政策提言におけるIUNSの影響力は大きい。例えば，WHOと IUNS は共同で多くの出版物を発行してきたことなど，WHO の人類の健康に向けた活動のうち，栄養面に関する学術的補強に大きな貢献をしてきた。また，FAO の目的のうち，飢餓や食糧不安の撲滅はIUNSと共同して進められてきた部分が大きい。IUNSの前会長はFAOの栄養部長も務めるなど，両者の繋がりは深い。実際に，2022年に日本学術会議が主催し，東京で開催される ICN でも，WHO や FAO が企画するシンポジウムやイベントも多く含まれているほか，WHO の事務局長補によるオープニングレクチャーなど，これらの団体からの講演者が多く来日する予定である。 （http://www.iuns.org/about-iuns/）
当該国際学術団体の対応する分野の学術の進歩に貢献した事例	IUNS の目的は，「地球規模での国際協力を通じて栄養の科学，研究，発展を促進させること」および「栄養科学者の情報交流や研究協力を奨励し現代の技術を通じて栄養科学の情報を発信すること」である。近年は特に，上述の「二重負荷」の問題が深刻になり，東京栄養サミットでも岸田総理が二重負荷の克服の重要性を強く訴えた。これに加え，IUNSの活動においては，世界的に拡大している2型糖尿病，腎臓病，心筋梗塞，脳梗塞，がん，精神性疾患などの非感染性疾患（NCD）の解決に向けた最新の知見を集約している。議論は後述のタスクフォースおよび国際栄養学会議（ICN）において行われてきた。例えば，2022年のICNの発表内容は，日本栄養・食糧学会が発行している国際誌の Journal of Nutritional Science and Vitaminology 誌，IUNSの機関紙であるAnnals of Nutrition and Metabolism誌，アメリカ栄養学会のAdvances in Nutrition誌にプロシーディングスとして取りまとめられるが，それらを通じての情報の発信は，今後の栄養学に強い影響を与える。IUNSで提案された成果は，各国の状況に応じた栄養政策に活用されている。特にWHOやFAOとの協力のもとに提言を発出するなどしている。令和3年に行われた食料システムサミットでも，FAOとの連携を深めた。また，精密栄養という概念を普及させ，個々人に最適な栄養の概念を広め，現在，世界中でその有効利用の研究が精力的に行われている。

政策提言や世界の潮流になりそうな研究テーマ・研究方式・研究助成方式等について	IUNS では８つのタスクフォフォースグループが活動しており，これらは今日的に特に重要な課題として世界の潮流となる研究テーマとして設定されている。この活動の成果は政策提言にも活かされ，今後のさらなる提言を目指して議論が行われている。それらは，「栄養とがん」，「精密栄養」，「持続可能な食」，「微量素栄養素介入のリスク便益評価と費用効果」，「食事の脂肪の質」，「国際的な栄養不良」，「伝統的食，固有の食，文化に根付いた食と栄養」，「子供の成長や発達の多面的な指標の確立」からなる。何れも人々の健康のみならず，各国の経済に対しても重要な課題である。例えば，「持続可能な食」では，農業，環境，健康の観点から，人間の健康だけでなく，地球の環境の保全も視野に入れた持続可能な食について検討している。WHO の SDGs（持続可能な開発目標）には栄養が強く関連する目標が多く含まれており，健全な食生活のための持続可能な食料システム，母親や乳幼児への適切な栄養供給は，特に重要なテーマと位置づけられている。栄養に対する 1 ドルの出資は 12 ドルの効果があるといわれている。日本政府が 2021 年 12 月 6 日～8 日に開催した東京栄養サミットにおいては，66 か国の政府を含む 181 のステークホルダーから 396 のコミットメント，270 億ドル以上の栄養関連の資金拠出が表明されるなど，栄養の重要性が再確認された。日本政府も今後 3 年間で 3000 億円の栄養面での支援を約束している。このような栄養に関するサポートが適切に行われるためには，IUNS による学問的な情報の提供が不可欠である。 栄養学の研究方法は，非常に幅広いものになっている。ヒトを対象とした大規模な疫学調査が多く行われるようになっている一方で，分子生物学的な技術による栄養素の詳細な作用機構も次々と明らかとなっている。ゲノムレベルでの研究も進み，食品や栄養に関する個人差についても注目が集まっている。 IUNS は，国際栄養学会議において 80 以上の国の若手研究者にグラントを提供するなど，研究の奨励にも力を入れている。栄養学への多大な貢献をした研究者への顕彰制度も充実している。

日本人役員によるイニシアティブ事項や日本からの参加によって進展や成果があったものについて	４年に一度開催される IUNS の全体会議である国際栄養学会議（International Congress of Nutrition, ICN）の第 10 回大会は，1975 年に当時の日本学術会議会長の越智勇一氏を大会長として，京都で開催された。さらに，第 22 回大会を日本に誘致することを IUNS 分科会と複数の関連学会とで進め，東京で開催することが，2013 年にスペインで開催された総会で決定した。現在，加藤久典日本学術会議特任連携会員（前 IUNS 分科会委員長）を組織委員長として，IUNS 分科会を中心に開催準備を進めている。また，現在 IUNS 理事である宮澤陽夫 前特任連携会員が IUNS との調整に当たっている。新型コロナ禍の状況であるが，第 22 回 ICN には既に 2200 演題以上の一般講演の応募があり，これはこの会議が日本で開催されるということに負う部分が大きい。さらに，加藤久典特任連携会員は，これまでに IUNS において選挙管理委員や授賞選考委員を務めてきた。
加入していることによる日本学術会議，学会，日本国民への変化やメリットについて	日本学術会議を窓口として，日本が IUNS に加入していることにより，IUNS の組織内での日本のプレゼンスがより強固なものになっている。また，日本学術会議 IUNS 分科会として活動ができることにより，IUNS 分科会が企画するシンポジウムにも，一般の日本国民が参加し，栄養学の最新の知見を得ることができる。
その他（若手研究者・女性研究者育成法，科学者の倫理に関する当該国際学術団体の基本方針や憲章，資金提供ソースの発掘における画期的な方策等の特記事項など）	2015 年より，発展途上国で博士を取得した若手の研究者向けの Re-Integration Grant の制度を開始している。各国で栄養学の若手研究者のリーダーシップ育成ワークショップを開催してきたが，日本でも 2010 年，2014 年，2017 年にこれを開催し，主にアジア圏の若手研究者の研鑽の場として有効に機能してきた。2021 年 12 月 11 日・12 日には，新型コロナウィルス感染拡大の防止に配慮し，オンラインで IUNS ワークショップ（栄養学のリーダーシップ育成国際ワークショップ）を開催した。Food system and nutrition intervention for sustainable healthy diets のテーマの下，９つのビデオ動画を事前配信し，参加者はビデオ動画を事前に視聴した上で，ワークショップに参加した。当日は，６つのグループに分かれ，まず，各国の状況の Country report を行った後，各グループのテーマに関してディスカッションを行った。最後に，全員がメインルームに集まり，

	各グループの代表が発表した。このワークショップにより，各国からの参加者が，最新の栄養学に関する知識を得ると共に，各国の栄養状況の改善に関する議論を深めた。また，グループワークを通じて，若手研究者のリーダーシップ育成にもつながった。

２　今後の予定について（内規第 11 条　活動報告）

総会，理事会の日本開催の予定について（招致等の予定も含め）	2021 年の 9 月に東京で開催予定であった第 22 回 ICN（International Congress of Nutrition）を，新型コロナウィルス感染症拡大に伴い，2022 年 12 月に延期し，総会や理事会もその際に開催される予定である。
日本人の役員立候補等の予定について	Council Member として，宮澤陽夫 前連携会員が 2013 年から 4 年間の任期を務めたが，2017 年の選挙で再任され，現在も務めている。2022 年の改選時には，加藤久典 特任連携会員（IUNS 分科会分科会 前委員長）を Secretary General として推薦することを計画している。
現在，検討中の日本からの提言や推進するプロジェクト等の動きについて	IUNS 栄養学のリーダーシップ育成国際ワークショップを 2010 年，2014 年，2017 年，2021 年に開催し，アジア地域の若手のリーダーの育成に貢献したが，今後も，３年に１度，開催予定である。

３　国際学術団体会議開催状況（内規第 11 条　活動報告）

総会・理事会・各種委員会等の状況	総会開催状況	2013 年（開催地：スペイン） 2017 年（開催地：アルゼンチン） 2022 年（開催地：日本）予定 2025 年（開催地：フランス）予定
	理事会・役員会等開催状況	理事会　2013 年（開催地：スペイン） 理事会　2014 年（開催地：オランダ） 理事会　2015 年（開催地：英国） 理事会　2016 年（開催地：英国） 理事会　2017 年（開催地：アルゼンチン） 理事会　2018 年（開催地：ナイジェリア） 理事会　2019 年（開催地：英国） 理事会　2020 年（開催地：英国） 理事会　2022 年（開催地：日本）予定

	各種委員会開催状況	選挙管理委員会 2013 年（開催地：スペイン） 選挙管理委員会年 2017 年（開催地：アルゼンチン） 各タスクフォースは，メール会議および電話会議を頻繁に行い，活動を推進している。各タスクフォースの 2021 年度の活動報告は，以下で公表されている。 http://www.iuns.org/task-forces/
	研究集会・会議等開催状況	第 20 回 ICN 2013 年（開催地：スペイン） 第 21 回 ICN 2017 年（開催地：アルゼンチン） 栄養学のリーダーシップ育成国際ワークショップ　2017 年（開催地：日本） 公開シンポジウム「コロナ下において考えるべき栄養」2021 年（開催地：日本） 栄養学のリーダーシップ育成国際ワークショップ　2021 年（開催地：日本）予定 第 22 回 ICN 2022 年（開催地：日本）予定 第 23 回 ICN 2015 年（開催地：フランス）予定
上記会議等への日本人の参加・出席状況及び予定		2013 年 第 20 回 IUNS-ICN（スペイン），200 名 （うち代表派遣：宮澤陽夫 IUNS 分科会元連携会員） 2013 年 IUNS 総会（スペイン），5 名 清水誠 IUNS 分科会元委員長，加藤久典 IUNS 分科会前委員長， 熊谷日登美 IUNS 分科会現委員長ら） 2014 年 IUNS 理事会（オランダ），1 人（理事：宮澤陽夫） 2015 年 IUNS 理事会（英国），1 人（理事：宮澤陽夫） 2016 年 IUNS 理事会（英国），1 人（理事：宮澤陽夫） 2017 年 第 21 回 IUNS-ICN（アルゼンチン），150 人 （うち代表派遣：加藤久典 IUNS 分科会前委員長） 2017 年 IUNS 総会（アルゼンチン），8 人 （宮澤陽夫 元連携会員，清水誠 IUNS 分科会元委員長，加藤久典 IUNS 分科会前委員長，熊谷日登美 IUNS 分科会現委員長ら） 2017 年 IUNS 理事会（アルゼンチン），1 人（理事：宮澤陽夫） 2019 年 IUNS 理事会（英国），1 人（理事：宮澤陽夫） 2020 年 IUNS 理事会（英国），1 人（加藤久典） 2022 年第 22 回 IUNS-ICN（日本），2000 名予定

	役職名	役職就任期間	氏名	会員，連携会員の別
国際学術団体における日本人の役員等への就任状況（過去５年）	理事	2013～2021	宮澤陽夫	(22～24 期）会員・(連携)
	Fellow	2017～2021	清水誠	(19,22,23 期)(会員)・連携
	選挙管理委員	2013～2017	加藤久典	(23，24 期）会員・(連携)
	Fellow	2009～2013	野口忠	(　　期）会員・連携
	Fellow	2009～2013	板倉弘重	(　　期）会員・連携
	Living Legend	2017～2021	小林修平	(　　期）会員・連携

出版物	(1) 定期的（年６回）　主な出版物名　Annals of Nutrition and Metabolism ２　不定期（　　）　主な出版物名

活動状況が分かる年次報告等があれば添付又はURLを記載
（http://www.iuns.org/news/）

４　国際学術団体に関する基礎的事項（内規第３条，４条，５条）

<table>
<tr><td rowspan="3">国内委員会（内規４条第３号）</td><td>委員会名</td><td>IUNS 分科会</td></tr>
<tr><td>委員長名</td><td>熊谷 日登美</td></tr>
<tr><td>当期の活動状況</td><td>（開催日時　主な審議事項等）
第１回　2021 年 1 月 25 日 15：00～16：00
委員長等の選任を行い，22nd IUNS-ICN（東京）の準備状況と当期の活動計画について審議し，12 月に IUNS Workshop を開催することとなった。

2022 年 12 月 6 日から 11 日に東京国際フォーラムで開催する 22nd IUNS-ICN については，IUNS 分科会，日本栄養・食糧学会，日本栄養改善学会のメンバーからなる幹事会を編成し，2018 年 9 月 30 日の第１回から 17 回の幹事会を開催し，また，IUNS の会長や執行部とも月１回，Executive meeting を行い，準備を進めている。

2021 年 12 月 11 日・12 日にオンラインで開催した IUNS Workshop については，IUNS 分科会，日本栄養・食糧学会，日本栄養改善学会，国立健康栄養研究所のメンバーからなる実行委員会を編成し，下記のように準備を行い開催した。

第１回　2021 年 4 月 26 日 15：00～17：00
IUNS Workshop の開催時期，開催方法等について決定
第２回　2021 年 5 月 31 日 15：30～17：00
Workshop のテーマ，Group work の実施法等について決定
第３回　2021 年 6 月 29 日 17：30～19：00
Workshop のプログラム，Group work 担当者等について決定
第４回　2021 年 7 月 27 日 18：00～20：00
9 つの Lecture および 6 つの Group の内容について決定
第５回　2021 年 8 月 31 日 17：30～18：45
参加者の分け方，伝達事項等について決定
第６回　2021 年 10 月 4 日 17：30～19：30
東京栄養サミットのサイドイベントに申請することを決定。また，参加者およびプログラム等について決定
第７回　2021 年 11 月 8 日 17：30～19：30
Group work の内容，オブザーバー参加者について決定
第８回　2021 年 12 月 8 日 17：00～19：00</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td></td><td></td><td>最終打ち合わせを行い，資料集およびアルバムの作成について決定

公開シンポジウムを２回行った。
2021 年 7 月 3 日 15：30～17：30
公益社団法人日本栄養・食糧学会との共催で，公開シンポジウム「コロナ下において考えるべき栄養」をオンラインで開催。

2022 年 7 月 3 日 15：30～17：30
公益社団法人日本栄養・食糧学会，韓国食品栄養科学会との共催で，公開シンポジウム「JSNFS, KFN and SCJ Joint Symposium on Nutrition and Nutraceuticals」をハイブリッドで開催。</td></tr>
<tr><td rowspan="4">内規第３（国際学術団体の要件関係）</td><td colspan="2">国際学術交流を目的とする非政府的かつ非営利的団体である
(1) 該当する　　２．該当しない
※根拠となる定款・規程等の添付又は URL を記載（ http://www.iuns.org/about-iuns/policy/ ）</td></tr>
<tr><td colspan="2">各国の公的学術機関及び学術研究団体等が国際学術団体に国を代表する資格を有して加入するものが，主たる構成員となっている（主たる構成員が，いわゆる「国家会員」であるか否か）

(1) 該当する　　２．該当しない

※根拠となる資料の添付又は URL を記載（ http://www.iuns.org/about-iuns/policy/ ）</td></tr>
<tr><td colspan="2">下記の事項（ア～エ）のいずれか一つに該当するか（該当するものに〇印）

(ア) 個々の学術の専門分野における統一的かつ世界的な組織を有するもの

イ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって，統一的かつ世界的な組織を有するもの

ウ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって，ア又はイの国際学術団体を連合した世界的組織を有するもの

エ 構成員のうち，各国代表会員がアジア地域等我が国が関係する地域等に限られるものであって，当該国際学術団体の研究の領域が複数の専門分野にわたるもの</td></tr>
<tr><td colspan="2">10 ヵ国を超える各国代表会員が加入している
(1) 該当する　　２．該当しない</td></tr>
</table>

	加入国数及び主要な各国代表会員を10記載	（　83ヶ国　）
		・各国代表会員名／国名・ American Society for Nutrition／米国 The Australian Academy of Science／オーストラリア The Nutrition Society／英国 Indian National Science Academy／インド Union Francaise pour la Nutrition et l'Alimentation／仏国 German Nutrition Society／ドイツ Italian Nutrition Society／イタリア National Research Council Canada／カナダ Chinese Nutrition Society／中国 Institute of Nutrition of the Russian Academy of Medical Sciences／ロシア